

氏名： 松野 瑠衣

実施国：セネガル共和国

調査研究

活動名称 「セネガル共和国農村部の女性が出産場所を選択するプロセスの検討」

実施期間 2013 年 8 月 1 日 ～ 2014 年 6 月 30 日

(1) 申請した動機

青年海外協力隊、JICA 感染症対策フィールド調整員、現職のセネガル保健マネジメントシステム強化プロジェクトへの参加を通し、仏語圏アフリカの保健政策支援に興味を持ち、今後も看護師として国際保健分野、特に仏語圏アフリカで仕事をしていきたいと考えようになった。国際保健分野の知識を深めるために、群馬大学大学院保健学研究科博士後期課程に入学し、これまでの経験と理論とを照らし合わせながら学びを深めている。この博士課程で学ぶ調査研究方法や理論を今後の仕事で実践に活かすことを念頭に、これまで西アフリカで保健分野の活動に関わりながら直面することが多かった母親と子どもの健康問題を課題に調査研究を行うこととなった。その一連の過程において、学術的に認められた調査研究手法に沿いデータ収集、データ分析を行うために経費が必要であったため、今般の協力隊を育てる会による帰国隊員/青年支援プロジェクトへ支援を依頼した。

(2) 活動内容概要

セネガル共和国（以下セネガル）では、母子保健政策の一つとして「専門技術者の立ち会いによる出産」指数の改善を目指している。専門技術者が少ないセネガルでは、女性たちが保健施設へ行かなければ専門技術者の立ち会いによる出産をすることは難しいため、保健施設での出産数を増やすことが「専門技術者の立ち会いによる出産数」を増やすことに繋がる。しかし、現実的にはセネガルの農村部の女性たちは自宅で出産しているケースが多く、そのことが母子の健康阻害要因の一つとなっている。本研究は、なぜ女性たちは自宅で出産するのか、女性たちがどのように出産場所を選択しているかというそのプロセスを明らかにし、セネガルの母子保健政策の改善への提言を得ることを目的にしている。上記の研究目的を達成するために、タンバクンダ州の農村部の女性を対象にフィールド調査活動を実施した。

調査対象地域は、首都ダカールから約 500 km 東に位置するタンバクンダ州（図 1 参照）内のンドガ・ババカ村、クロー村、ネテプロ村、ハンドライエ・テッサン村、ピラ村 5 村（図 2 参照）を対象とした。対象としたすべての村には保健ポストと呼ばれる診療所があり、看護師、または助産師が診療や出産介助にあっている。セネガルには全国に 1,244 の保健ポストがあり、そのうちタンバクンダ州内には 86 存在する。セネガルでは保健ポストは第一次医療機関として位置づけられており、医師はおらず 3 年間の教育を受け国家資格を持った看護師、または 2 年間の教育を受け国家資格を持つアシスタント看護師が保健ポスト長として勤務している。保健ポストでは、通常の診療の他、妊産婦検診、出産介助、予防接種、新生児・乳幼児健診を実施しており、母子保健政策の大きな役割を担っている。対象とする村の保健ポストはこの州内のタンバクンダ保健区、マカクリバンタン保健区、グジリ保健区いずれかの管轄だった。一つの保健ポストは数村を管轄しており、保健ポストによっては 100km 以上離れている村を管轄するところもある。他国で行われた多くの先行研究では、保健施設から家が遠いことが住民の施設へのアクセス阻害要因の一つであることが明らかになっている。長距離、交通便の悪さは物理的に住民の保健施設への受診行動を遠のかせることは容易に想像が付き、セネガルも例外ではない。そのため、本研究ではその他の要因を明らかにするため、保健施設との距離という因子を除外するべく、保健ポストが村内にある村を対象とした。



家事の合間に面接調査を受ける女性



女の子達、左 2 人は子どもを背負っている

(3) 活動の成果・苦勞した点・反省点等

現地での面接調査を実施した対象者は以下の通り。

- ・ 女性 34 人
- ・ 医療者 16 人（保健ポスト長：8 人、助産師：1 人、看護師：2 人、コミュニティーレベルの医療従事者：4 人、コミュニティー内での母子保健啓発担当者：1 人）

セネガルの農村部の家族は 10 人から 20 人くらいの大家族で成り立ち、女性たちは日々その家族のための家事をこなさなければならず忙しい。特に本調査の対象とする女性は出産可能な年齢ということもあり比較的若く、家族の中で家事を担う割合が高かった。電気や水道がない家がほとんどであるため、家事はすべて手作業であり、水も数キロ離れたところから汲んでくる必要がある。食事の準備も原材料から作るため時間と労力を要す。そのような家事の合間に女性たちに面接調査を依頼することが一苦勞だった。面接を始めたものの、食事準備をしなければならないといって面接を中断されたこともあった。

家事の時間等を十分考慮して面接依頼をしなければならないこと、また面接には時間を要することを十分に説明し理解を得る必要があったと感じた。ほとんどすべての女性たちはフランス語が理解できないため、面接は通訳を通して行われた。そのため時間は質問内容の割には長時間に及んでしまい、女性たちの拘束時間が長くなったと反省している。

面接調査は季節、天候、農村の季節のイベントに合わせて行わなければならなかった。雨季には村までの道が悪くなるため、調査のために村に行くことが困難な場所もあった。また、農村部の人々は天候や季節、村内のイベントに合わせて生活している。あらかじめ電話等で約束を取り付け、調査のために村を訪問したが、葬式や結婚式などの村内のイベントや、収穫のために住民が全員畑に行ってしまったために面接調査ができないこともあった。調査日程はそのような事態も考慮し、余裕をもって計画することが大切であることを痛感した。

村を訪問する際には事前に訪問のための連絡調整が必要だったが、フランス語でのコミュニケーションが得意でない村人、筆者が電話で意思疎通することは難しく、現地語がわかる協力者に連絡調整を依頼する必要があった。

(4) 今後のプラン

今回、帰国隊員／青年支援プロジェクトにて支援を受けた調査は 2014 年 6 月末に完了した。今回の面接調査の結果を定性データ分析手法に従い分析し、仮説・理論生成を行う。手順は以下の通り。

1. 面接調査で録音された内容を逐語録に書き起こす。
 2. 逐語録から得られる生データの意味を残しながら一文にまとめ素材とし、素材の内容を簡潔なコードに示す。コーディングシステムはデータの内容を吟味しながら適宜修正する。
 3. 作成されたコードの類似するものを集め、サブカテゴリーとし、命名する。
 4. 更に類似するサブカテゴリー同士をまとめてカテゴリー化する。
 5. カテゴリー間の関連性を分析し、関連図を作成し理論生成を行う。
- 以上の過程より、結論を導き出し論文執筆をすすめていく予定である。